

煩惱について——原始仏教を中心として——

佐藤義博

一 『ウダーナ』三・十 (Ud. 32) に、ウルヴェーラーのネーランジャラー河岸の菩提樹の下で、釈尊が初めて悟りをひらいた時、仏眼で世間を見渡し、その時の様子が次のように述べられている。

「実に、世尊は仏眼で世間を見渡すと、衆性が食欲によっても生じ (rāga)、瞋恚によっても生じ (dosa)、愚癡によっても生じる (moha) 多くの苦悩によつて悩まわれ、多くの熱悩によつて焼かれているのを見た。」

さらにまた、『相応部』二二・百 (SN. III. 151) では、次のように言う。

「比丘たちよ、常に自らの心を觀察すべきである、すなわち、この心は長い間食欲 (rāga) によつて、瞋恚 (dosa) によつて、愚癡 (moha) によつて汚されていると。比丘たちよ、心が汚れているから、衆生は汚れる、心が浄まるから、衆生は浄まる。」

周知のように、ここに説かれている食欲 (rāga)、瞋恚 (dosa)、愚癡 (moha) は、三火、三毒とも呼ばれ、最も根本的な煩惱

とされている。それ故に、原始經典では、rāga・dosa・moha と一括されて、その否定形を含め、頻繁にあらわれる。本稿では、そのように法数化された rāga・dosa・moha について、その用例を整理しつつ、若干の考察を加えたい。

二 まず、食欲・瞋恚・愚癡が一括されてどう呼ばれているか検討する。初めに、前述の三火 (ayo agni) と呼ばれている例について、『長部』第三三¹⁾、等誦經 (DN. III. 217) に、次のように示めされている。

「三火あり、すなわち貪火 (rāgaggi) と瞋火 (dosaggi) と癡火 (mohaggi) とである。」

さらに、『相応部』三五・一一 (SN. IV. 19-20) および『律藏』大品一・一一 (Vin. I. 34) では、

「比丘たちよ、一切は燃えている (adittā)。比丘たちよ、一切が燃えているとは、どういふことか。比丘たちよ、眼 (cakkhu) は燃えている。色 (rūpa) は燃えている。眼識 (cakkhuvīñāṇa) は燃えている。眼の接触 (cakkhusamphassa) は燃えている。ま

た、およそこの眼の接觸を縁とし生ずる樂・苦・不苦不樂の受も燃えている。何によって燃えているのか。貪火 (ragaggi)・瞋火 (dosaggi)・癡火 (mohaggi) によって燃えている、あるいは生・老・死・愁・悲・苦・憂・悩によって燃えている、と私は説く。以下、耳・鼻・舌・身・意は右に準ずる。」

また、『増支部』七・四四 (AN. IV. 44) では、

「バラモンよ、これら三火を捨て、避け、親しんではならぬ。三とは何か。貪火 (ragaggi) と瞋火 (dosaggi) と癡火 (mohaggi) とである。何故に、貪火を捨て、避け、親しんではならぬのか。バラモンよ、貪欲に染まり、打勝たれ、心を捉えられたものは、身によって悪行を為し、語によって悪行を為し、意によって悪行を為す。彼は身によって悪行を為し、語によって悪行を為し、意によって悪行を為して、身滅んで、死んだ後、悪処・悪趣・地獄に生まれる。それ故に、貪火を捨て、避け、親しんではならない。以下、瞋火・癡火は右に準ずる。」

次に、『如是語經』(It. 92-3) では、韻文で、

「貪火は欲望に染み (ratta)、『夢中になつてゐる (mucchita) 人を焼き (dāhati)』、瞋火は憎惡を懷き (vyāpama)、『殺生する人を焼き、癡火は愚昧にして (sammutiha)』、聖者の法を知らない人を焼く。一方、日夜正等覺者の教えに専心し、常に不浄を想う者 (asubhasatthi) は貪火を消し (nibhāpeti)、『勝れた者は慈 (metta)』によって瞋火を消し、智慧 (pañña) によって癡火を消す。」

以上が三火と呼ばれる用例で、意外に少ないが、燃盛る火

煩惱について (佐藤)

を貪火・瞋火・癡火と巧に譬えている。しかし、韻文には、貪欲のみを火に譬えている例がある。たとえば、『法句經』二〇二偈では、「貪欲にひとしい (rāgasama) 火 (aggi) は存在しない。瞋恚にひとしい (dōsasama) 不運 (kall) は存在しない。」また同じく二五二偈では、「貪欲にひとしい火は存在しない。瞋恚にひとしい不運 (sāha) は存在しない。愚癡にひとしい (mohasama) 網 (jāla) は存在しない。渴愛にひとしい (taṇhasama) 河 (nadi) は存在しない」などの例が見出される。数少ない例とは言え、これは本来貪欲を火に譬えていたのが、貪欲・瞋恚・愚癡が一つのまとまった概念として定着するにつれて、後に一括して三火と称されるに至ったものと思われる。

次に、三毒と呼ばれている例についてであるが、この呼称は原始經典には見られない。

その他、原始經典では、貪欲・瞋恚・愚癡を様々に呼んでいるが、機械的に羅列している場合が多いので、その用例と出典を以下に掲げる。

kiñcana (所有) ~ DN. III. 217; MN. I. 298; SN. IV. 297.
pamāṇakaraṇa (量因) ~ MN. I. 298; SN. IV. 297.
nimittakaraṇa (相因) ~ MN. I. 298; SN. IV. 297.
khila (碍) ~ SN. V. 57.
niḡha (惱乱) ~ SN. IV. 292; V. 57.

煩惱につづつ (佐藤)

mala (垢) ~ SN. V. 57.

bandhana (縛) ~ SN. IV. 292.

ādinava (過患) ~ AN. I. 216.

以上が、貪欲・瞋恚・愚を一括して、異称を与えている用例である。ただどの術語も、使用頻度がきわめて少ない。これと類似した概念である三不善根 (akusalamūla) と呼ばれる lobha・dosa・moha の系列も、原始經典では、わずか四經典に五ヶ所⁽⁴⁾、単に不善とする例を含めても六ヶ所ほどあらわれるに過ぎない。これを三結⁽⁵⁾、五下分結⁽⁶⁾、五蓋などの用例と比較するならば、その差異は明瞭である。もともと、前掲のように様々に呼ばれているが故に、一つの名称で統一することが無理であったとも考えられる。いずれにせよ、少なくとも原始經典では、三火、三毒等の呼称は一般化していなかったと言える。

三 さて、貪欲・瞋恚・愚癡がわれわれ衆生にとって否定されるべきものとして存在するならば、これらをいかに滅すべきか、が問題となろう。つまり修道論の問題であるが、紙数の都合で以下にその用例と出典を掲げる。

八正道 (正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定) とするもの ~ SN. V. 5-6, 31-2, 34-5, 37-8, 40, 42,

54, 58.

五根 (信根・精進根・念根・定根・慧根) とするもの ~ SN. V.

241-3; AN. II. 149-50.

三学 (増上戒学・増上心学・増上慧学) とするもの ~ AN. I. 230-1.

以上、修道の面から、貪欲・瞋恚・愚癡をいかに滅するか、について説かれている經典は、比較的限られており、しかも貪欲・瞋恚・愚癡の滅尽が主題というより、八正道・五根・三学が主題となっている。ところが、貪欲・瞋恚・愚癡のそれぞれの特徴をとらえて、『増支部』六・一〇七 (AN. III. 45-6) に、「貪欲の捨断のために、不淨想 (asubhasañña) を、瞋恚の捨断のために、慈 (metta) を、愚癡の捨断のために、智慧 (pañña) を修習すべきである」とあり、むしろこの方が当を得た修道のように思われる。ただ原始經典には、これらをいかに滅するか、を説くよりも、単に捨断すること、あるいは離れていることを説くほうが、より一般的である。⁽⁷⁾

四 次に、貪欲・瞋恚・愚癡が滅した状態について、検討する。まず、その用例と出典を掲げる。

nibbāna (涅槃) ~ SN. IV. 251, 261; V. 8 (cf. Thag. 79, 704 = AN. III. 347)

arahatta (阿羅漢果) ~ SN. IV. 252.

asaṅkhata (無為) ~ SN. IV. 359, 360, 360, 362.

amata (不死) ~ SN. V. 8.

brahmacariyapariyosāna (梵行の究極) ~ SN. V. 16-7.

brahmacariyaṭṭha (梵行義) ~ SN. V. 27.
brahmaññartha (婆羅門義) ~ SN. V. 26.
sāmaññattha (沙門義) ~ SN. V. 25 (cf. Dh. 20)
pariṇā (遍知) ~ SN. III. 26, 160, 191.
upasan (寂靜) ~ MN. III. 246.

以上、十例ほど見出され、それぞれがほぼ理想の境地とみなされているものであるが、ここにおいても、修道について述べたことが、あてはまるように思われる。ただ前掲の『如是語経』のように、本来「消す」を意味する nibbāna が食欲・瞋恚・愚癡の滅尽というのは、まさしく当を得た表現と言えよう。

そして、「如来・応供・正等覺者は、すでに食欲を離れ(vītarāga)」、瞋恚を離れ(vīradosa)、愚癡を離れてゐる(vīramoha)と⁽²⁾いふ、また「漏尽の比丘には、食欲・瞋恚・愚癡が滅せられ(niruddha)、⁽³⁾静まり(vupasantā)、止息してゐる(paṭippassaddha)と⁽⁴⁾いふ。あるふはまた、そうした者を「法を語る者(dhammavādī)」と⁽⁵⁾いふ、「善男子(santa)」と⁽⁶⁾いわれる。しかし、四沙門果の一つである一來果になつては「食欲・瞋恚・愚癡を稀薄にする(rāgadosamohānaṃ tanuttā)」だけで、滅尽にまで至らないのである。

五 以上、食欲・瞋恚・愚癡について様々に説かれているが、これを要約すると、少なくとも、食欲・瞋恚・愚癡が根

本煩惱として重要視されつつも、これらを三火・三毒等と呼ぶことは、原始仏教では、一般化されなかったようである。また、これらをいかにして滅するか、という問題よりも、単に滅することが強調されている。

本稿では、食欲・瞋恚・愚癡を一括して、rāga・dosa・moha とするものを中心に検討した。その他、食欲・瞋恚・愚癡には、若干言及した三不善根と呼ばれる lobha・dosa・moha と、本稿ではとりあげなかったが、rāga・dosa・avijjā⁽⁷⁾の系列も存在する。ただ後者の系列は韻文においてのみあらわれるので、韻律との関係を考慮しなければならないのである。

1 但し、tayo agga という術語はならぬ。

2 中村元訳『真理のことは・感興のことは』(岩波文庫)の解釈に依る。

3 cf. Jā. II. 178; SN. I. 188.

4 DN. III. 214, 275; MN. I. 47; AN. I. 201; It. 45.

5 MN. I. 489. cf. AN. I. 189 f, 194 f; II. 191 f.

6 tīni saṃyojanāni(sakkāyaditthi, vicikicchā, silābatarapārā-masā), DN. I. 156; II. 92, 200, 252; III. 107, 132, 216; MN. I. 9, 34, 141, 226, 465; III. 81; AN. I. 232, 242; II. 89; IV. 12, 380.

7 pañca-orambhāgiyāni saṃyojanāni(三縛は kāmaccandha, vyāpāda などを含む) DN. I. 156; II. 92, 200, 252; III. 107,

